

A M U R D E R C O B A L T 6 0

フルヤマメグミ * 516 文字

ジェーニヤはわたしを愛している。行商人の彼は、村に帰るたび珍しい物品をくれる。

この秋、ジェーニヤは鉛の箱を背負って帰ってきた。分厚い蓋を開けると、ペンダントが入っていた。銀製の鎖に、トップは青く輝く鉱石。海のようにも、空のようでもない色彩は、ジェーニヤの瞳にそっくりだった。首にかけて、「綺麗だね」と褒めてくれた。

その晩、何も告げずにジェーニヤは消えた。

数日後、身体の変調が始まった。手足が腫れ、だるくなり、何度も吐いた。数日後には、全身の皮膚が火傷のようにむけ、髪が抜け落ち爪もはがれ、下痢や血の涙が止まらなくなった。家族は医者探しに奔走した。

ようやく都会の医者が来た時、わたしは人と思えないほど醜い姿になっていた。医者はペンダントを手にとると、鼻息荒く叫んだ。

「これは危険な放射性物質だ！」

医者は興奮してホウシヤノウの害を語ったが、学のないわたしには何のことかわからなかった。父がジェーニヤの鉛の箱の話をする時、医者は「なんて男だ」と呟いた。そしてわたしの首に手を回し、ペンダントを外した。

やめて、返して。ジェーニヤの瞳を奪わないで。

懸命に手を伸ばすうち、力が抜けた。わたしは自分が事切れたことに気づけなかった。

『ジェーニヤの青い石』